



昭和50年(1975年)
12月号(No. 366)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 100円

目次

- こころの山と技の山
—日本山岳会創立70周年記念講演から—
(片山全平) ……(1)
マッキンレイの麓から
(佐々保雄) ……(2)
山を歩く
駒の湯行(渡辺公平) ……(3)
浄法寺山(山下久男) ……(4)
「旧上高地山荘のこと」を読んで
(内ヶ島吉広) ……(4)
ナンダ・デヴィ縦走計画
(ナンダ・デヴィ委員会) ……(5)
図書紹介
山で会った人 ……(6)
高所登山研究 ……(6)
会員通信
名古屋地方の登山家の集い
(尾上 昇) ……(7)
後半の旅・アラスカへ
—植村直己氏の通信— ……(8)
三水会・湯船温泉現地集合報告
(中川恵資) ……(9)
山下一夫氏の三回忌を迎えて
(坂倉登喜子) ……(9)
その他
「山岳」第70年記念号原稿募集…(7)
会員動向・会務報告など…(11), (12)

●日本山岳会創立七十周年記念講演から

こころの山と技の山

(榎 有恒氏)

(小西政継氏)

日本山岳会が創設七十周年を迎え、その記念講演と映画の会が、東京では十月二十日九段会館で、大阪では同二十八日毎日新聞社ホールで、それぞれ開かれ、両会場とも千人に近い人が参加、盛況裡に終わった。

「明治三十八年十月十四日、東京飯田橋の富士見楼という料亭で創立に関する最終的な打合せ会が開かれてから七十年」(今西錦司会長の「創立七十周年を迎えて」から)、その経過の中で、東京会場では、昨今のヨーロッパ・アルプスに題材を求めた「冬の北壁の中で」の小西政継氏、半世紀をこす山歴をもつ「山への回想」の榎有恒氏

と、演者の紹介が今西錦司会長からなされた。

榎氏の講演は、時間的な制約があったにもかかわらず、登山の記録の重要性を認めながらも、それがすべてではなく、「登山の興味やたのしみは身近なところに無限に存在している」として、登山が人と山との対立ではなく、「一つにな」という感情であり、自然に対する敬虔な念慮であります」と、登山姿勢に対する所信を強調、聴者に深い感銘を与えた。

ついで「マナスルに立つ」(コダクローム、1時間37分)が上映され、十九年前の歴史的な登頂の感激をよみがえらせた。また、会場

内には記念事業の一つとして、このほど完成した『覆刻 日本の山岳名著』(全18点、22冊、定価19万円)のサンプルも展示され、七十年の年輪をいまあらためて感じさせた。両氏の講演内容は次のとおり。

小西氏の「冬の北壁の中で」

「皆さん、今晩は。冬のアルプスの話をしたいと思えます」の前置きから、まず同氏の所属する山岳同志会の内容を説明、約百人の男世帯の同会のきびしいトレーニングを浮き彫りにした。同会は創立二十年、この間、年に一人の遭難者を出しているが、自分の山登りが、仲間と死とは別もので、影響されないと、淡々と語ったのも小西氏らしいところで、「死に直結する登山では、そのためにもきびしいトレーニングが要求される」とを力説した。

ヨーロッパ・アルプスへの発想

は、ハーラーに刺激されたもので、「どうせやるなら全力をかけられるものとして、当時(一九六七年)日本人がだれも手がけていないマッターホルン北壁を対象にした。独自のトレーニングについて、真夜中のマラソン、冬の滝谷の意識的な三晩以上のビバーク、絶食などを開陳するが、要するに「北壁一点を目指して、精神を集中する」ことを強調、現場に直面しても「ニコリ笑う」精神登山法から、マッターホルン山頂の十字架に体をしぼりつけてのビバークにも耐えたという。

「ナンダ・デヴィ縦走を成功させよう」

日間の絶食のうちに一月一日山頂に立ったが、十日間垂直の壁にいますと、平らなところでは倒れてしまい、人間のバランスはこうしたものかと思つた。そして両足の指を落としたが、冬の北壁というところは、こういうところであると了解していなければならぬ」と、この凍傷による指切断の事故以来、三年で千五百メートルの壁を登り、明年は同会の仲間と三千メートルのジャヌー北壁に挑む計画を披露、小西氏らしい結びとした。

榎氏の「山への回想」

ゾーシニールのモンブラン、アルフレッド・ウィルスのウェッターホルンと、まず、近代登山の発端から説いた榎氏が、はじめてヨーロッパ・アルプスに足を踏み入れたのは五十年前で、「当時はクリンケル、トリコニーの鋸が使用され、アイゼン、ザイルもありました。しかしすぐれたガイドは氷壁でもアイゼン、鋸は使わない。用具の限界を設けており、自力に自信をもっていた」と、テクニカル・バーバリズムをあらためて提起した。話題は、アルプスからヒマラヤ、アンデスのエキスペディションに発展し、第二次大戦後の

飛躍的な登山用具の進歩に伴い、世界の登山界が未踏の山頂、新しいルートへと展開したことに及び「だが、いつ、どんな登山をしたか、その記録は高く評価される。それは、未知の世界に対しての健闘をたたえ、ほかの人に可能性を実証する」として記録を認めながら、しかし「その値打ちは、外的な評価にはなく、きびしい登山に全力を傾倒して、はじめて得られるもので、決定的な自信をつかむ本人の幸せだろうと思います」と精神的な成果に重点を置いた。

「さて登頂は大きな目的ですが、この、記録を求めることだけが登山のすべてではない。登山の興味やたのしみは身近なところに無限に存在している。登山の動機は、むしろ内面的であり、好みや能力の違いのままに自由に選べる」として、初歩から高度なものへ、科学的、芸術的、定着した余暇活動の健康の場、都市化に伴う自然環境の破壊への反省、自己表現、などと登山が多様な側面をもつことを指摘、「自然の理法に順応して行なわれなければならない。大切な条件です」と、この点を強調した。

また他の競技との比較から、登山は「自然にいだかれ、世俗から開放され、自然の一員であることを発見し、体験する。この感情、情緒こそ、山との心の交流であっ

て、私にとっても心の交流は山の魅力でありまして、たえず山へとかり立てられるのであります」と山への心境を披露した。

こうした日本人の登山姿勢は、「精神的風土でもあり、存在するすべてのものとの対立ではなく、一つになるという感情であり、自然に対する敬虔な念慮でもあります」とし、マナスル登頂後、カトマンズの祝賀会で楨氏が語った、「われわれ日本人は山を征服するという考えはない。山と合一することにある」という言葉に、一ドイツ登山家が「ヨーロッパ人にと

マッキンレイの麓から

佐々保雄

北大探検部の学生たちと日米合同アリュエーション学術調査の二ヵ月を終え、アンカレジに到着。ちょうど、土、日、レイバデー（九月一日）の連休にぶつかり、どこも休み、これ幸い？ とマッキンレイ国立公園に出かけました。生憎の曇りで、ディナリ（この大きい山）そのものは眺め得ず、残念でしたが、グリズリ（熊）、カリブ、ムース、ドル羊、山あらし、狐、リスなどや、多くの鳥、美しいメドウに充分堪能しました。

しかし、この入園前、国立公園協会の千家哲麿氏の紹介で、国立

っても感銘深いものがある」と、同登山家の著書に書いていることを披露した。そして、この思想は単に同登山家だけのものではなくゲーテの「一切をいただくもの、一切を支えるもの、それはお前も、私をもいまだき支えているではないか（ファースト）やトインビーの「宇宙の背後にある窮極的な存在」と近い精神であり、登山を通じて到達した「不可思議な感情」であり、自然と人との同一は東洋思想だけのものではない、として多くの人々の共感を呼んだ。

（片山全平）

公園庁のアラスカ州総監督オルブライト氏に会いましたが、その折各種資料と共に「これを日本の登山者たちに」と渡された次の「注意」には小生も日本人の一人として全く恥かしい思いをしました。今年もアラスカの山地に入った日本の登山隊は、アンカレジの領事館に連絡のあった分だけで三十五隊（他に届出のないもの、また下山通知を怠った隊もだいぶある由、うちマッキンレイだけで十四隊、まことにお盛んなことで、と喜んでよいのかどうか。どうもわれわれはエコノミック・アニマル

だけでなく、登山アニマルでもあるようです。

以下、その折手渡された米国内務省レターヘッド入りの文書を紹介します（訳は日本語の出来る米人がしたもので、ところどころおかしいところもありますが、むしろ原文のままにしました）。

——ディナリー山（マウント・マッキンレイ）を環境よく美しくする運動は、自然と山登りを美しく親しくしようと言う新思想の為に考え出しました。この運動の基は人間それぞれはこの世のただの一砂である考えです。この哲学の目的は人が野生自然に親しむ事です。

北米大陸の最高点ですから、マウント・マッキンレイがこの自然と山登りをきれいにする運動の最初の目標になりました。ウエスト・パットレス・ルートが現在マッキンレイ山の頂上への最も人気を持つ登りやすいルートです。前の無責任な隊（米国隊でも、外国隊でも）にこのルートの汚染が大なる人間の働きには厳しく叱るべきです。

一九七一年にオレガン州の七名がマッキンレイ山の西パットレスを登りに来ました。入山前彼らが「自分達は作るゴミを持ち運んで下山するつもりです」と述べました。この望みに成功しました。その為山の大規模なゴミ採集の考

えが生れました。

一九七三年の春にディナリー山運動の一部分として二つの遠征隊がマッキンレイ山の西パットレスルートを登りに来ました。最初の隊は21日間（四月二十七日―五月十八日）を使って約五二一〇メートル迄行きました。大二隊は二十三日間（五月二十九日―六月二十日）を使って目標の頂上に立つ事が出来ました。両隊が前の隊に残されたゴミを集めて燃やしました。燃えない物は運び出しました。

一九七四年の七月三十日から八月十二日迄の間国立公園サービスと米国陸軍の合併隊が西パットレスから二千あまりのゴミを燃やして山から持ち運びました。この合併隊の目的はゴミ採集で登山ではありませんでした。二十人が四八四〇メートルまでのゴミを運びました。

外国隊も美しくする為にこの問題に気づかなければなりません。最近の二年間は日本隊がマッキンレイ山隊の全ての四〇％になっています。この間採集したゴミはおもに日本隊の物である事が明らかになりました。ですからみなさん、気を付けましょう！

国立公園サービスが前より公園の規則を厳しくしています。未来は自然を汚す違反者は裁判をさせる事があります。努力しているのにマッキンレイ山のゴミ問題をなくす事が出来ま

せん。将来のために残ります。明らかに一つの登山隊そのものはこの問題を解けません。全てのマッキンレー山に登る隊の問題です。ですから皆さんが努力しあつたら将来の人の為に美しい自然を残す事が出来ます。初登攀の様に感じて登れます。

マウント・マッキンレー登山隊のみなさまへ
下記の注意事項をおしらせいたします。

①登山申請書と健康証明書
山希望者は個人別に登山申請書と健康証明書（お医者さんがSGZした証書）を送って下さい。登山二ヵ月前に国立公園サービスへ送って下さい。

②Radio 送受信機
各登山隊は必ずRadio（受発両用）を使つて下さい。（非常の場合のため）Walkie-Talkieは不足です。この非常用RadioはAnchorageやFairbanks市内の業者達から約七十五ドルで借用できます。ラジオは気象の受けに、みなさんの安全に必要です。その重さは約一・五キロです。

③登山隊長様は登山前、後に出発日時。そして下山日時を公園本部（六八三―二四一／六八三―二五九五）に報告下さい。

④下山報告
各登山隊長は登山結果報告書一通公園長へ送り下さい。報告事項 ④毎日別の天気 ⑤装備の欠乏（失敗の事）

⑤各Campの位置 ⑥事故Routeの変更 ⑦特別な事々 ⑧各登山隊員、個人別の登山最高点の高度、この報告は将来の登山隊のために必要だし、公園本部で必要です。

⑥衛生（清潔）とごみ処理
マウント・マッキンレー登山隊は必ず厳守下さい。国立公園の鉄則の一つは各登山隊は必ずそういうごみものこしてはいけません。この点に対しての質問は公園本部に連絡下さい。

⑦その他の不便な事や英語が不便な方はアンカレジ市内国立公園本部となりの毛皮工場長（日本語

■山を歩く

駒の湯行

山日記の編集者には昔からなかなかの知恵者がいて、山日記修学旅行と銘うたった一つの行事をつくっておいてくれた。編集会議でもないし、反省会でもないが、編集者と、かつて編集にたずさわったことのある連中が何人か集まって山の中で山日記について語りあうという一泊二日くらいの小旅行である。

現役の間は、山日記の編集だとか調査で出かけてくるよとでもいいえ、大義名分がたつが、編集をやめてからも何年にもなる昨今

が通ります」とお気軽にそうだん下さい。日本語でお電話どうぞ。二七二―二〇九二

因みに、私たちのアリュエーション行は、「最も知られる、最も日本に近いアメリカ」を、手許に資料の多い千島列島との比較において探究するため、今年はアメリカのエクスポローラスクラブの隊と行動を共にし初年度のことで問題把握、考察、と言った小手調べの程度でしたが、その意味で充分な成功を取めたと思います。いづれこれについては、適當の折に。

——九月二日 於アンカレジ——

渡辺公平

ではそうはゆかない。「編集に関係もしていないくせに、山日記の仕事で山へ出かける」とは解せませぬ」とカミさんがいうだろう。そのカミさんの眼をゴマかすのに「修学旅行」という名称が非常に役立つのだ。なんだかわからないが、修学旅行ならまあ仕様がなくてしょうてなことになってしまいうらい。

というわけで、今年も十月のはじめ、魚沼駒の山麓にある駒の湯に一泊、翌日バスで大湯から銀山平へ枝折峠を越え、奥只見湖を遊

覧船で回り、ダムサイトからシルバラインを小出に戻るという修学旅行に参加することができた。

メンバーはリーダーが編集委員長の池戸君、現役の安藤、上原両委員は駒の湯へ先発しているのので上野に集まったのは山日記担当理事の皆川、編集委員OBの初見、折井、松丸、若溪堂の坂本の諸氏と小生。総員九名のパーティーとなった。

上野発十五時三十八分の「とき10号」だから小出に着いたのが十八時二十三分。

山日記一九七五年版の行程図「越後三山」を見ると、大湯から駒の湯までは車道になっている。折から雨も降ってきたこととタクシーを頼んで駒の湯へ。そして暗いランプの下で深更まで山日記談義。

夜が明けた頃には雨もやみ、駒ヶ岳の頂上が宿の裏の空高く仰がれたが、朝食の頃には雨雲におおわれてしまった。さて、駒の湯のことだが、主人の話だと、これは十月いっぱい閉めてしまうそうだから、そのつもりで利用してほしいとのこと。ちょっと不便なのは十六時半を過ぎると食事が作ってもらえないこと。それで私たちも小出駅前夕食はすませて行ったのだが、ランプだから明るいうちでないと料理ができないからだそう。良心的といえよう。だいぶ日が短くなってきたから、近

いうちにさらに三十分くりあげたい。七時の朝食は逆に三十分遅くしたいということだった。

アクセサリーでなく、実際にランプで生活している温泉宿とあれば、これもやむを得まい。ランプの湯の好きな人に推せんする。

大湯に戻り、定期バスで雨の枝折峠を越えて銀山平に出る。出帆が十二時だということで、乗船場の伝之助茶屋で休憩。御存知会員佐藤伝之助氏の経営する店である。店の若い人が、おやじは小屋のほうにいてくれといいたところ、なかに車なら二、三分もあれば来れるんだからとおやじを呼びにとんでいった。果せるかな十分とたたないうちにビールをひっさげて伝之助氏が現われる。十日ほど前に私は清水峠下の清水で語りあつたばかりだが、その後どこかで転んだしたたか胸部を打ったため、きょうは腹酒で湿布をしているから匂うでしょうという。昨夜来サントリーのダルマをかえこんでいる初見君とは好取組、八十四センチという大岩魚などの釣話を肴に、老いてますます知識欲旺盛の初つあん夢中、船が定刻通りに出たのがまことに気の毒だったが、お陰でスケジュールを狂わさずに済んだ。

雨依然やまず。船上から中の俣の入江の奥に望めるという平ヶ岳も見えず、荒沢岳も灰の又もすべ

て雲の中。「剣ヶ倉のすぐ下まで車が入るんだから、一度平ヶ岳へ登りに来て下さいよ。四時間で登れるんだから……」といった伝之

■山を歩く

浄法寺山

山下 久男

今年二月二十八日、京都ホテル暁雲の間で今西錦司全集の出版を祝う会があり、それに私も出席した。その時、今西さんから、「この春、越前の山にでかけるから一緒に登りましょう」というお誘いがあった。私はその時のくるのを鶴首していた。四月九日、氏から速達があり、浄法寺山(一〇五三m)に登ることになった。その速達には、「お誘い合せの上、車で御参加を賜りますならば光榮に存じます」とあった。早速、加賀山岳会の幹事、田辺弥寿雄君に連絡、希望者を募ってもらった。私は知友から四名の希望者を得た。私を含めて九名が、三台の車で、氏一行のお宿三国港に走った。氏一行は前日、越前海岸の国見岳へ登られていた。氏一行の五名は通りに出て、われわれの到着を待っておられた。五名のうち四名の方々とは昨年、加賀大聖寺川のみなもと、大日山(一三六九m)の登頂を共にしていた。

その時は、登頂の前後その山麓

助氏の言葉がいつまでも頭の中に残った。
来年の修学旅行は平ヶ岳でやるか。

の真砂で宿を共にし、歓談を共にした。鳴鹿橋を右にみて、九頭竜川右岸に沿って、車は走る。窓から心地よい風が入る。下浄法寺村を通りぬけると山道にかかる。そこは上浄法寺村である。冠山(八三八m)の頂が仰がれる。その形は冠のようで、王朝時代の風折鳥帽子のようであった。二俣という所からは車を前進させることは出来ない。車を降りて、登山服装をととのえ、登り始めたのが八時三〇分。私のみは地下足袋に巻脚絆。時代に遅れて一步さがって行く気持があるからか、仏岩着八時五五分、さらに二〇分で清水小場。ここには清らかな水が音をあげて流れている。清冽この上もない。休憩のあとつじが原を目ざして進む。私は地をほうようにして行く。直前の今西さんはゆっくり、ゆっくりと、割に背を曲げないで進まれる。それでいて早い。やがて尾根を右へと伝って行く。左右の展望は開ける。右手は大仏寺山、飯降山、さらに荒島岳とつづき、左

手は火燈山、南、北の丈鏡山や大日山がづらなる。冠山山頂にたどりつく。さっきまで仰いでいたのに。若い連中は、南につづく浄法寺山頂へと急ぐがごとくであるが私はゆっくりと風景を楽しんでゆく。残雪は一メートル余もある。樹木の芽はまだ固い。しかし春はもうそこに来ているのだ。春光数日にして、その固さをほぐすというところだ。私は樹幹をなぞてみる。その多くはなめらかである。風雪に耐えているものの姿だ。私は高山の清らかな、可憐さにもひかれるが、風雪に耐え、たくましく生きぬいている山頂付近のこれら雑木林が無性に好きだ。殊に早春のころのそれを見ると、生きる歓びがこみ上げてくるのだ。

山頂には一二時一四分に着いた。今西さんは山上の標柱をなで、一行とともに杖を振って歓声を上げられた。この山で七七六

「旧上高地山荘のこと」を読んで

内ヶ島 吉 広

『山』八月号の冒頭に日高さんの「旧上高地山荘のこと」が掲載されたが、読んでいるうちに「飯田屋主人云々」が文中に出て来て、改めて当時のことが思い出されてなつかしく、筆をとった次第である。

私は叔父とよんでいた。叔父は八年前に五十八歳で死去したが……叔父が山研の前身である案内人組合の小屋を手に入れたのは、二十八、九年頃ではなかったか、と思う。その頃「上高地にある小屋を手に入れたから一度見てこい。多少整備したり、寝泊りできるようにしてくれ」と云われ、早速現地を訪れた。当時はまだいまだ人が多くなく、静かでのどかな上高地であった。それ以前昭和十三、四年に「清水屋」の爺さんから山に來いと云われ、今で云うアルパイトをしたことがあるが、その頃とくらべてみても変らぬ風情であった。

さて現地の地理はよく知っていたが、小屋の前に立ってみて、なるほどよい所だと気に入ったものだ。これなら山に入る前進基地にもなり、下山の休み場所にもなると喜んだものである。その時はまわりの下草を刈り、窓をあけ風を入れて大掃除をし、枯木や小枝を拾い集めて屋根下に積み一泊して帰った。

以来手放すまでの期間、ずい分利用したものである。山仲間には「別荘をかしこくれ」と云ってはうらやましがられながら山行の便に供したものである。そんななかでも特に印象に残っているのは、確か昭和三十年、叔父の四十六歳の時「誕生日を山で迎えたいので一緒に駆け」とのこととで八月初旬

縦走計画予算 総額 30,884,000円

国内費	19,339,000円	国外費	11,545,000円
渡航費	4,548,600円	滞在費	1,380,000円
輸送費	1,462,500円	輸送費	4,718,000円
装備費	10,013,600円	現地装備費	1,049,000円
食糧費	1,077,000円	現地食糧費	975,000円
酸素費	500,000円	酸素費	900,000円
医薬品費	100,000円	人件費	1,230,000円
写真材料費	200,000円	保険料	157,000円
梱包費	437,300円	梱包費	36,000円
事務費	1,000,000円	現地事務費	300,000円
		予備費	800,000円
資金計画			
日本側調達	28,084,000円	インド側	2,800,000円
		調達(70,000ルピー)	
隊員負担	14,000,000円		
寄付金	14,084,000円		

* 文部省の後援決定

本会のナンダ・デヴィ縦走計画に対して、十月十五日付で文部省より、文部省後援名義使用が許可

された。これは東京都山岳連盟および日本山岳協会を通じて、六月に文部省に申請していたものである。日本、インド両国による合同登山の意義が各方面に理解された

ナンダ・デヴィ縦走計画

ナンダ・デヴィ委員会

二人で調理人特製の料理や従業員からの祝いの酒、ウイスキーなどしたまがザックに詰め込みタクシィで山荘に行き、ランプの下で楽しいパーティーをやり、翌日西穂山荘の村上さんを訪れ昼食をご馳走になったことである。その時の叔父の顔が今でも忘れられない。叔父が亡くなってすでに八年になるが、山荘が立派になり多くの

岳人の役に立っていることは山好きの叔父にとってさぞ本望だろうと思う。いま、私の手許にある「ローライコード」は初期のものであるが、相変らずレンズはシャイライを出した際に、叔父を想い、山荘の思い出につながる。私も今年こそは山荘を訪れてみたいと思っている。

* 合同協定成立

八月から九月にかけて梶正彦を訪問させたことは、会報第三六四号(十月号)でお知らせしたが、梶はIMFと合同登山の細部におたつて折衝を行なって帰国した。国情を異にする団体の協同事業であるという観点から、両団体間で二十二項目から成る協定書を取り交した。日印ナンダ・デヴィ縦走登山隊は、明年度IMFが直接援助する最大の登山隊であるとされている。この協定成立によって、JACとIMF両組織あげて縦走成功に向けて協力する体制ができあがった。

* 実行予算三〇八八万円と資金調達

去る十月六日開催のナンダ・デヴィ委員会で総額三〇、八八四、〇〇〇円の実行予算が決定した。その内訳は別項予算表のとおりだが、八千メートル近い峰と峰とを結ぶという縦走計画の困難さから装備費が大きくふくらみ、当初目論見より約一・六倍の予算規模となっている。

これに必要な資金の調達については、本会の登山隊としては前例のない高額な隊員負担金を供出することになっているが、隊員のみ

で負担しきれぬ金額ではない。十一月初旬より委員会は内外のみなさんに協力方をお願いしているが、世界的な経済不況のなかで楽観を許さないものがある。とくに、会員各位のご支援をお願いする。

IMFにおいては、二八〇万円の日印円相当額を支出することがさきの協定で同意されている。こ

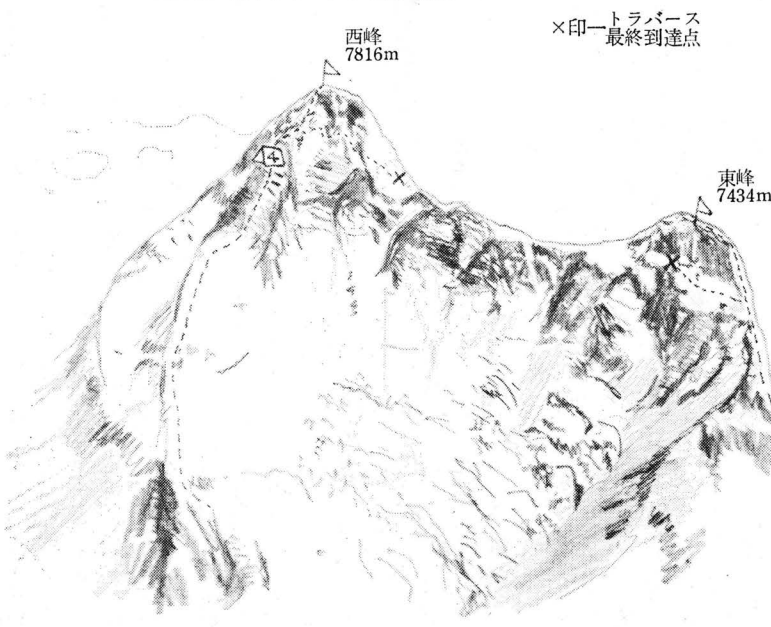
の額はIMFが昨年度中に各隊に補助した金額とほぼ同額ということである。

* 隊員予定者

十月六日の委員会において次のとおり隊員候補が内定した。

△日本側▽渡辺兵力(総隊長)、鹿野勝彦(隊長)、伊丹紹泰、小原俊、梶正彦、加藤保男、桐生恒治、

1975年仏・印ナンダ・デヴィ登山隊ルート



小林政志、重広恒夫、関章司（医師）、寺本正史、鳴満則、長谷川良典。

ハインド側／ブレイム・チャンド少佐、キラン・クマール少佐、ラ・ラテン（医師）、プラネシュ・チャクラバティ、ピンジュ（ダージリン登山学校教官）、タシ（ダージリン登山学校教官）。

* フランス・インド隊の記録

第三六四号でフランス・インド隊が縦走不成功に終わったことをお知らせしたが、その後、登頂者氏名、ルートなどがわかった。



『山で会った人』

松方三郎著

著者歿後、生前上梓した単行本以外に書きのこした文章が、単行本にまとめられることを願ったのは、著者の友人知人だけではなかったとおもう。このたび嗣子峰雄君（本会々員）と築地書館の協力によって四冊の書物にまとめられ、続刊されることになったのは、この要望に答えるものというべきで

六月十三日、西峰登頂、R. Renaud, J. Coudray
六月十四日、東峰登頂、W. Cecchinel, D. Lahao
六月十六日、西峰登頂、Col. Sandhu, Maj. P. Chand.
六月十八、十九日、東峰より西峰へ P. Villard, W. Cecchinel, Daubas
西峰より東峰へ R. Renaud, J. Coudray
それぞれトラバースを試みたが悪天候のため失敗した。（ヒンドスタン・タイムス 六・二一より）
（堀内章雄・梶正彦）

た晩には松方君のただに山だけではない、広い活動範囲や多方面に亘る趣味、それに深い造詣、素養のほぼ全貌が窺われることになるであらう。

第五冊として再刊される『アルプスと人』が幻の書は少々大袈裟だが、物の不足な戦後の所産だっただけに、装を新たに送らるものもよいことだ。いずれにしても、あちらこちらに寄稿したものをまとめてはどうかと、いくらやイヤイ言われても一向相手にしなかった松方君が存命だったら、五冊どころか一冊の書物も中々陽の目を見ることはなかったとおもうが、私は『山で会った人』を手にして、好い本をのこしてくれてうれしいが、本など一冊も出さないで、いまだに達者でいてくれたら、その方がもっとうれいに違いないと沁々感じたことだった。

（一九七五・十一・七記）
（追記）* 『ウェストンさんと寺田博士』の原題は『アルプスの廻り合ひ』、『アルプス記』へ載せるにつき改題、中程に三行ばかり削除した部分があり、本書では復活されている。

* 頁のつけ方、小見出しの位置、所々に白紙頁のあることなど、造本担当者の好みを強調しすぎた感がある。

* 表紙のヒラ、扉などに著者名、本の題名、発行所をゴタゴタと印刷し、殊に『松方三郎エッセー集』

とPR用の文句まで刷り込んだのは、どういう意図か解するに苦む。

* 写真版一葉もないのは一冊に入ると、あともという配慮から来たのか、しかし故人となった著者を偲ぶためにも遺影一葉ぐらい欲しかったとおもう。

紙装二六八頁・昭和五十年十月・築地書館刊・定価一八〇〇円
（藤島敏男）

『高所登山研究』

日本山岳会編

今日、ネパール・ヒマラヤをはじめ、六〇〇〇mをこえる高峰への入山者数は、おそらく日本人が圧倒的に多いにちがいない。しかし、外国隊にくらべると、相対的にはきわめて小さな成果しか挙げていないのではあるまいか。表面的にはともかく、大半は依然として、『イミテーション登山』の域を出ていない。その上、残念なのは、遭難事故の多いことである。

その理由のひとつは、ヒマラヤ登山者のほとんどが一回行っただけで卒業してしまう『通過登山者』だということだが、それと同時に、経験が蓄積され、継承されるメカニズムが弱体であるという点が指摘できる。ここに、日本山岳会が果たすべき大切な機能があると思ふ。

このほど刊行された『高所登山研究』は、その期待に応えるべく高所登山研究委員会が二年間にわたって続けてきた研究成果を、論文集の形で発表したものである。今後刊行されるはずの『エクスペディション研究』、『氷雪技術研究』と合わせた三部作の第一作であり、さらに高所登山のための、信頼に足る、実践的でハンディな教科書づくりも検討されている。

本書の中心的なテーマは、当然のことながら高度の問題であり、高度への挑戦という角度から、歴史的展望、高所医学、戦略・戦術、酸素補給、遭難等、多様なテーマをとりあげている。

論文の多くは既に発表されたものだが、研究会と平行して企画が進行しそれに基づいて書かれた論文が多いので、古典的な意味合いをもつ松田論文のようなものも含めて、一貫した視点が貫かれ、すぐれた研究書であると同時によき啓蒙書ともなっている。

付録に収められた内外登山家の高山病、高所順応等の経験、意見についてのアンケート結果も、貴重な資料である。

研究会に加わった者の一人として、何気なく書かれた文章のなかにも熱気を帯びた議論の跡がにじんでいて感深いものが多い。

例えば、原論文のなかで、高所登山の対象を六〇〇〇m以上に定義したこととか、高所順応と高所

順化の概念を区分したこと、あるいは、非特異的高山病と特異的高山病の区分による高所順応への示唆など、何でもないことのように見えるがきわめて重要な問題提起を含んでいる。この秋のイギリス隊によるエヴェレスト南壁からの登頂は、まさに驚異的な成果だが、ニュースを丹念に追ってみると、成功の第一のキポイントとは、第三キャンプを省略してキャンプ間の距離を長くし、思いきった荷上げをしたことにあるようだ。この点は、本書で高橋善数氏が指摘している新しいタクティクスと符合することも興味深い。

本書の刊行は、担当理事であり、本書の編集委員でもある原真氏の

●お願い!

今年度の会費をまだ納入されていない方がおられます。七十年の歴史をきざんできた日本山岳会の運営と今後の発展は会員各位の会費に負っているのです。思い立ったが吉日、すぐ銀行か郵便局からご送金ください。お願い!

* 東京都、神奈川、埼玉、千葉各県在住者 〇八五〇〇円。
* その他の国内在住者 〇六〇〇〇円。
* 国外在住者 〇二五米ドル。
振替口座 〇東京
三 一四八二九番

銀行振込 〇三和銀行本郷支店

努力に負うところが大きいが、本書の企画を側面から盛りたて、共通の議論の場を提供してくれた『岩と雪』誌の協力も、従来にならぬユニークな協力形態として注目される。

今日、ヒマラヤを中心に登山の内容はほとんど変貌している。本書をもとに活発な議論が展開されることを期待したい。

●会員通信

名古屋地方の登山家の集い

名古屋地方は昔から大変登山熱の高いところといわれている。山に入る地理的な条件がよそにくらべて有利だからだろう。

に登るにしても、名古屋はまことに都合の良い位置にある。また名古屋から車と徒歩で、わずか一時間ちょっとのところに、日本でも有数の岩登りのゲレンデである御在所岳のあることも登山をさかんにしている大きな要因となっている。

えられ、海外の山へと夢をはせるのである。お互いに知らぬ同志でも、御在所岳などでよく顔を合わせることから自然に交流が始まり、結構友達になつたりすることがある。

いたしかねますので、かならずコピーをおとり下さい。

マナスルからヤルン・カンまで石坂昭二郎

松方三郎略年譜 山崎 安治

〇当選作は『山岳』第七十年号に発表、賞金(または記念品)を贈呈します。

ダージリン国際登山家集会―思い出の断片 三田 幸夫

松方三郎略年譜 山崎 安治

『山岳』編集委員会
山崎安治・金坂一郎・山本良三・中島寛・雁部貞夫・節田重節・高遠安(担当理事) 近藤信行

小島鳥水論待望 加納 一郎
日本山岳会と自然保護―富士山ケーブルから連峰スカイラインまで 渡辺 公平

松方三郎略年譜 山崎 安治

『山岳』第六十九年主要内容

黒部の山案内人 金坂 一郎

松方三郎略年譜 山崎 安治

ヒマラヤ登山の動向(一九七三〜七四年の日本隊を中心に)

湯口 康雄

松方三郎略年譜 山崎 安治

マナスル登頂(一九七四年春)

槇 有恒

松方三郎略年譜 山崎 安治

片山 全平

日本山岳会への尽力 藤島 敏男

松方三郎略年譜 山崎 安治

黒石 恒

指導者としての松方さん 加藤 泰安

松方三郎略年譜 山崎 安治

橋村 一豊

遠い国から―グリーンデルヴァル

松方三郎略年譜 山崎 安治

が、これらはいわば山岳団体の行政機関であって、個人としての交流の場ではない。

酒を飲みに行ったり、山へいっしょに行くことも大いに結構なのだが、そういった個人、個人が自由に語り合ったり、催しものなどを通じて交流する場となると案外ない。

名古屋に限らず、一般的に登山家同志のお付き合いというものはへたくそなもので、すぐ自分の所属にこだわったり、折角の企画もつまらぬ中傷で中止になったり、なにごとによらず自分勝手に処理してしまおうとする傾向がある。まして同じ地方に住んでいながら、お互いに口もきかぬようになつたりすることがあれば、実に淋しい限りでありはしまい。

前置きが長くなったが、表記の「集い」は、こんなことから誰でも気軽に参加できるような個人同志の交流の機会をつくらうという主旨で始められたわけである。

世話役には言出し屋である湯淺道男、中世古隆司、小栗嘉浩、尾上昇の四人（いずれも本会々員）があたることにした。

第一回は昭和四十九年九月七日に成城大の橋村一豊氏にご来名願い、ジャスーの登頂報告会を行った。単なる報告会でもつまらぬので「橋村一豊氏の自慢話を聞く会」としてごく内輪に案内状を出したところ、橋村氏の靈驗もあらたか

なのか一〇〇名近くの方々にご参加をいただいた。

最初の試みとしては大成功であったと我が意を得たわけである。報告会の方は最初いささか照れ気味の橋村氏もいつしか興に乗

り、参加者をいつもの橋村節で大いに湧かせていた。

第二回は昭和五十年六月二十八日に小西政雄氏を迎えて講演会を催した。

小西氏の何のてらいも感じさせない、むしろ淡々と語る様子は、氏のアルプスやヒマラヤでの登攀歴のすさまじさを知るものにとつて、かえって凄愴な岩との闘いを想像させた。

また小西氏は席上スライドと8ミリフィルムを持参されなかつたことに触れ、次の機会にはアルプス三大北壁のスライドと8ミリフィルムを見せてくれる旨の発言があった。

第三回は昭和五十年十月二十八日、カラコルムに遠征してライラ峰の登頂に成功した穂稜山岳会隊の登頂報告会を行い、隊長の石川富安氏と登攀隊長の藤岡謙二郎氏から登頂に至るまでの様子をスライドを交えながら報告していただいた。

今夏、名古屋地方からはこのライラ隊のほかにも本会の東海支部もカラコルムのラトック峰に遠征隊を送っている。当初このラトックの報告もあわせて企画していたのだが都合で実現することができず実に残念であった。

また十二月十五日には女子エヴェレスト登山隊の久野さんや田部井さんをお招きしてエヴェレスト日本女子登山隊の報告会を開催した。これは観客動員の関係から企画を愛知県山岳連盟に持ち込み、県岳連主催の報告会としておこな

った。これら四つの集いは世話役のわれわれ四人のほかに主催発起人というかたちで愛知県山岳連盟や勤労者山岳連盟、RCC IIなどの各団体にそれぞれ関係されている国島陽三、下里昌弘、岡田弘、伊藤正俊、梅田浩生、蟹江武士、松浦正司、高田光政の各氏にご参画

いただいている。お陰様で毎回一〇〇人近い方々のご参加をいただき、気を良くして次のプランを練っている次第である。

とにかくこの「集い」はマンネリに陥ったり、世話役が負担を感じたりしないような息の長い、そして誰をも拒まぬ気軽な個人の交流の場として育ててゆきたいと思

っている。はなはだ無責任のようだが、下らぬ中傷が入ったり、拒否反応などが現われたらさっさと止めるつ

もりである。

今後は講演会や報告会のような型式の集まりばかりではなく何か別な方法でもと考えている。何か良い知恵でもあればぜひともご教示いただきたいものである。

なお名古屋地方在住の会員の方で今後この「集い」に参加を希望される方は、名古屋瑞穂区堀田通り8番地、小栗嘉浩氏、電話（八八）〇五三三までご連絡下さい。催しの都度ご通知申し上げます。（尾上昇）

後半の旅・アラスカへ

植村直己氏の通信

三ヵ月以上にわたった越夏地アングラソン・ベイの生活を切りあげ、10月5日、ツンドラの陸路、犬橇を走らせ、三日がかりでケンブリッジ・ベイに帰ってきました。そして8月21日付、9月10日付の2通の便りや乾物の小包を大変ありがたく受けとらせて頂きまし

た。ケンブリッジ・ベイに出てきましたものの町から4 Kmばかり離れた湾の奥に犬をつれ、一人小屋に入っています故、小包の乾物は前回のように味もわからないエスキモーに消されることなくひそかに持帰り、一人いただいております。この小包もさることながら、

9月10日付の便りでは植木屋のお話（注）をわが身とおきかえ、無

事到着まで絶対に気をゆるしてはいけない、絶対の安全を第一目標にして、石橋をたたいて渡る気持で後半戦をやり通したいと、気のゆるんだわが身にいきかせております。御忠告ありがとうございます。

8月末にC・Bから Anderson にもどった後、極地はたちまち雨から雪にかわり、9月始めには3日間も続く猛吹雪が襲いました。そして、ツンドラの湖の水は張り出し、9月末には10 cm以上、気温はマイナス20度Cにも下る日がやってくる、いよいよ本格的な冬の到来です。

狩りは9月上旬をピークに中旬にはピタリと網にかからなくなり、網を今後は湖の下に穴を開けて仕掛け、マス、アークティックチャー、ホワイトフィッシュなどの湖魚を揚げておりました。

雨から雪にかわった天候は雪とともに雷鳥が大群をなし、北から南へ海岸を移動しはじめ、すでに白く衣がえをした雷鳥を一日平均50〜60羽ととって、毎日われわれの腹をみたしていました。雷鳥の飛来は、雷鳥、モグラなどをあさるオッペ（フクロウ）、タカなどがつきまとい、キツネとり用のわなを仕掛け、毎日6、7羽のフクロ、タカをとっておりまし。一日としてとじこもることなく、朝から夕方まで鉄砲をもって出歩くのが常でした。

これからの予定はまだはつきり致しませんが、10月中旬より犬のエサを求め、C・Bよりどこかへ移動、末か11月始め頃C・Bに戻り、準備をはじめ、11月中旬頃にアラスカへ向け後半の旅につく予定です。

元気に頑張つてやっています故御心配なく。

C・Bにて10月8日 植村直己

／小原勝郎宛

(編集注) 植木屋の話とは、「高名の木のぼり」といひし男……という「徒然草」第百九段のこと。

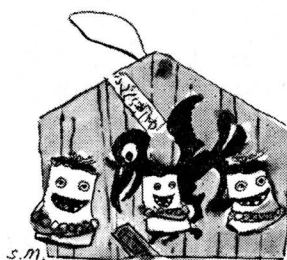
三水区・湯船温泉 現地集會報告

三水区が復會されて二回目の現地集會が去る十月十一日(土)駿河小山町にあるひなびた鉱泉宿、湯船温泉あさかえ園でもたれた。この湯船温泉も前回阿寺沢滝見荘と同じく今井夫妻が見つけられたもので、国鉄御殿場線駿河小山駅から約四キロ西北へ入った、丹沢前衛の湯船山の麓にある閑静な湯である。

四時頃から、駅から歩いたり、車を利用したりして、現地へぼつぼつと到着し、懐しい顔が揃い始めた。錦織氏は明日予定しているハイキングの現地調査に朝から行かれ、明神峠から湯船山を越え柳島部落に下ってコースの備備に当り、汗を体いっぱいにかいて宿に

帰り着かれた。小野氏もほぼ同コースを錦織氏より少し後に歩かれ、宿に靴を脱がれたのはもう七時に近かった。

七時頃から広間で懇親會が始まり、まず今井喜美子氏の司會で、沼倉氏の、今夜の集りは来る十月二十日よりネパールへ出発される坂倉氏の歓送會をも含めた懇談會であるという旨と、今後の三水會の現地集會の予定の提案を求めた話と挨拶があり、それを受けて、坂倉氏は、長い間心に温めていた念願のエーデルワイスのふるさと、



カット／松本慎太郎

ランタン谷を訪れることになった経緯を、しみじみと感慨深げに述べられた。一杯入ったところで、順番にこれからの三水會のあり方、三水會への要望などが楽しい雰囲気の中で、各自個性的な雑談も交えながら話された。特に、かつて東京支部のために情熱を傾けられた日高、石原両先輩を、一度三水會にお呼びしようという希望は全員の一致するところであった。また、にぎやかに歓談が続く中で、小野氏がハモニカで奏でた

古い台湾の調べは印象深く、全員の喝采を受け、会員の多芸な一面を感じさせた。

翌日は有志で、明神峠から湯船山のハイキングを計画していたが、朝から雨模様様の天気やがて本降りとなったため山行は中止になり、前日の錦織、小野両氏の現地踏査の労苦も無駄になってしまった。

松本氏他有志十三名は箱根強羅にある竹友荘(竹中工務店)でくつろぐという提案に全員賛同し、車で雨に濡れる乙女峠を越えて、仙石原から強羅へ入った。竹友荘は緑で囲まれた静かな環境にあって、木造建てのいかにも和風の落着きを感じさせるたたずまいであった。ここにおいても、大地の恵みを楽しみ、マツタケの美味に舌鼓を打ちながら、楽しいお喋りは続いた。歓談する楽しさ、わけても思ったことを好きなように語り、また自分の知らないことを人から聞く喜びを感じ得たのも、三水會の方達の豊かな個性と知性によるところが大であると思われる。山崎、高橋、金坂、松本、名児耶の五名は竹友荘にそのまま残り、他の諸氏はまだ降り止まぬ雨の強羅を離れて散会となった。

(中川恵資)

△参加者／山崎金次郎、坂倉登喜子、高橋照、今井雄二、今井喜美子、中保、松田雄一、金坂一郎、松本熊次郎、錦織保清、小野利次、

名児耶達男、沼倉寛二郎、網倉志朗、斎藤桂、中川恵資。

当日あいにく不参加の中河与一、折井健一、鈴木邦之諸氏から多額の御寄附があり、松田(雄)、進藤波男氏より各々ウィスキーの差入れがあった。

(計十九名順不同)

山下一夫氏の 三回忌を迎えて

「こちふかばにほひおこせよ……」の古歌にあるごとく、春が来るごとに主なくとも春を忘れずカタクリの花咲く陽春四月十四日、早くも山下一夫氏の三回忌を迎えた。山下家のごつごうで命日より二日前の去る四月十二日の日曜日、本郷の徳源院に親族および故人の知己、友人等が招かれて、山下一夫氏の三回忌法要が行なわれた。

当日日本山岳会々員で最も親しかった今井夫妻、渡辺公平、茗溪堂の坂本氏、坂倉登喜子、交通博物館当時の知人、未亡人の友人および親族の方々約十五名が参列し、本堂にて法要を済ました後、墓参をした。

墓前では渡辺公平氏が山下一夫氏の遺稿をまとめて茗溪堂から出版された『かんあおい』の完成を見せ、生前カタクリと一緒に見に行った滋子夫人の友人が、庭に一輪咲いたカタクリの花を詠んで、「かたくりの花一輪の三回忌」の

句を書いた色紙を捧げて、花とのつながりの深かった故人の霊を慰めた。

帰途六義園近くの魚源で供養の小宴が催されたが、席上渡辺公平氏より、山形博物館へ行かれて、山下氏の腊葉コレクションを見てこられた様子のお話があった。

聞くところによると山下氏の腊葉は現在採集できないような珍しい植物が多く、一種類が何本もあるもので、一通り作ってもまだ幾組かできるだけの分量があり、全部整理するのに五年ぐらいかかるということであった。

東京の科学博物館ではどうして山形の博物館へ行つたのかと、残念がっておられたそう。山形には親友の後藤幹次氏がおられ世話された訳だが、山に近い博物館の方が故人にはふさわしい場所であると思われた。

生前特に好んで歌われた「角兵衛獅子」や、「静かな湖畔」などの歌を皆で合唱し、故人をしのんで賑かなうたげを最後に三回忌を終った。

(坂倉登喜子)

昭和五十年十二月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六六一

利根川商事株式会社

発行所 法人 日本山岳会

発行者 今 西 錦 司

編集代表 大 森 久 雄

(813) 二二八六(代表)

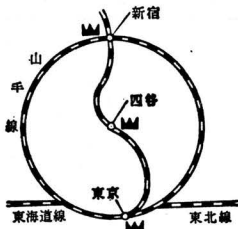
振替口座東京三三〇四八二九番

東京都港区赤坂二丁目三番六号 印刷所 株式会社 技 報 堂

登山・スキー用具専門店

●買いやすい
山の店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736●北へ来たら
山の店●フレッシュな
山の店

四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番



かたるぐシンティ
でんや 281-8456
中央区・八重洲4の1

香山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店 中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京店 中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店 北区曾根崎上-1日47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町 1-4 (28) 34440



坂本直行

厳しい開拓のクワを持つ傍ら、好きな山に登り、美しい北海道の自然を心ゆくまで眺めて、描き綴った楽しい作品集。

新刊

山・原野・牧場 A5判 134頁 口絵淡彩
¥1,500 千200

—ある牧場の生活—

山のことはあまり出て来ないでも、ほんとうは牧場に立って山を眺めている人の気持ちを書いたものである。ほんとうの山を知っている人の日記である。そういう意味でこの本は山の本であり……山崎春雄

画文集

雪原の足あと

〈雪原の足あと〉は直行の生涯の一つの転機を記念する本である。つまり30年間離したことのないクワと決別して、一人の画家としての直行がここから出発するのである。……松方三郎

B5判 206頁 ¥3,800 千300

原野から見た山

右手の柏の樹林の上には南日高の山群が、とんがった美しい起伏を見せていた。僕ははじめて見る原野からの山の姿を幾枚かスケッチした。それは実に心のたのしいものであった。……本文より

B5判 144頁 ¥4,200 千300

開墾の記 A5判 230頁 口絵淡彩
¥1,400 千220

あのすさまじい重労働と貧乏に耐えて過した30年は、何によって支えられていたのだろうか…それは私をとりまく自然の美しさで、私を打ちのめした自然の厳しさであった…もう一度当時のようなエネルギーと情熱が欲しい……再版の言葉より

淡彩画えはがき 6枚1組
北海道の山・原野・花 ¥300 千40



茗溪堂

東京都千代田区神田駿河台2-1
振替東京 8-24723
最寄り書店又は直接ご注文下さい

会務報告

10月理事会

(10月3日午後6時本会ルーム)

▽出席者 今西会長、織内、望月各副会長、浜野、高遠、小倉、山本良、大森、皆川、大倉、黒石、田村俊、神崎、橋本、浅田各理事、佐藤、浜野、折井、宮下各評議員
▽委任 山本健、近藤、原、浜口各理事、林、太田各監事
▽議案
・日本K2登山隊(日本ヒンズークシニ・カラコルム会議)の都岳連に対する推薦状交付について (浜野) 承認
・年次晩餐会について (浜野) 承認
・七十周年記念晩餐会として若干の趣向を考える。12月6日(土)午後6時より、京王プラザホテル五階コンコード・ボール・ルーム

・昭和五十年年度予算収支中間報告 (高遠) 了承
・報告事項
・UIAA大会出席報告 (佐藤) 了承
・ナンダ・デヴィ準備委員会報告 (浜野) 了承
全隊員を近日中に決定
・日印女子登山隊準備状況 (黒石) 了承
・日本側隊員を本日の委員会決定
・七十周年記念講演会 (橋本) 了承
・七十周年のしおり作成中
・七十周年記念支部行事 (望月) 了承
山梨支部 9月20日甲府で集会
静岡支部 10月5日静岡で集会
福岡支部 10月8日九州山荘で集会
・本会前監事村尾金二氏が9月27日に死去、駐ネパール大使小林春尚氏が9月29日に死去、本会より弔問 (高遠)

▽委員会報告

・集会 (神崎)
集中登山(蓼科山) 10月18日・19日
・自然保護 (山本良)
外部団体との懇談会を計画、環境庁(10月)、林野庁(11月)、自然保護協会(12月または1月)
・図書 (山本良)
図書交換会 10月25日
・会報 (大森)
広告料金を値上げする (浅田)
・学生 (皆川)
11月19日に大学山岳部学生対象の講演会を予定
山日記
11月20日発行

ルーム日誌 (50年10月)

1日(水) ナンダ・デヴィ委員会
2日(木) 婦人懇談会 ナンダ・デヴィ委員会
3日(金) 理事会
6日(月) 集委会、ナンダ・デヴィ準備委員会
7日(火) 山岳編集委員会
9日(木) ナンダ・デヴィ委員会
13日(月) 集委会、山研委員会、婦人ヒマラヤ研究会
15日(水) 海外連絡委員会
16日(木) 図書委員会、ナンダ・デヴィ委員会
17日(金) 学生会
21日(火) 図書委員会
23日(木) 自然保護委員会、ナンダ・デヴィ委員会、婦人ヒマラヤ研究会
24日(金) 指導委員会
25日(土) 図書交換会
27日(月) 集委会、婦人ヒマラヤ研究会
28日(火) 青年懇談会
30日(木) ナンダ・デヴィ委員会
31日(金) 婦人ヒマラヤ研究会

10月中来室者六〇九名
会員異動
退会者
七四七〇 高橋 正道(50・10・2)
海外ニュース

トレント映画祭

受賞作品の紹介

トレント山岳映画祭の受賞は、以下のようであります。
イタリア・トレント市グランプリはフランスのジャック・エルトルの「あるガイドの死」"Mort d'un Guide"(Jacques Etraud)に与えられました。
イタリア山岳賞は、イタリアのエルンスト・ペルトルの「アコンカグア・ア・アンデスの王」"Aconcagua, le roi des Andes"(Ernst Perth)に与えられました。
金メダル賞は、イギリスのバリー・コックロフトの「長かりし冬」"Too long a winter"(Barry Cockcroft)に、また、探検映画の優秀作品に与えられるゴールデン・ネプチューン賞は、アイスランドのオスバルドゥル・クヌーセンの作品「ハイマエイの火」"Fener auf Heimaei"(Osvaldur Knudsen)に与えられました。
ドイツ国家杯は、五本の優秀候補作品のうち、なかんずく、ローター・ブランドラーの「ドリュエの西壁」"Westwand der Dru"(Lothar Brandler)に与えられました。

さらに、国際審査委員会は三本の映画を推薦しました。すなわち、オランダのジャン・ボーン作品の「世界の最高峰」"Die Hoesten Gipfel der Welt-Die Sherpas von Nepal"(Jan Boon)と、イギリスのニール・マッカラムの

七四五六 松岡 良助(50・10・23)
名前訂正
四二六四 白石よしこ
六四三四 後城 謙二
支部変更

「まわりの世界―失われた世界」"The world about us-The lost world"(Neil McCallum)と、日本の山本和夫作品「エベレスト登頂、極限の人間の記録」(TBS製作)の二本であります。特に最後にあげた日本の作品は、特別審査委員によって与えられるUIAA(国際山岳連盟)特別賞を獲得しました。日本の登山家たちは、技術的な点において、最も現代的な方法を完全に把握しているのみならず、古典的な登山倫理を忘れていないということとして、この授賞が行なわれました。



カット/山里寿男

解禁されたソ連の山 「カフカス」と「パミール」

自由主義国の一般登山者に、ソ連邦カフカスのバゼンギ地区―エリブルイス峰(五六三三m)、ウシバ峰(四七〇九m)、シヘリダ峰(四三六九m)お

よびカズベク峰(五〇四七m)などが解放されて久しい。これらの山への入山手続きは、ソ連国営旅行局インツェリストとその日本代理店が受付けている。しかし受入れ施設の関係から、登山者の数は制限されている。
●カフカス
前述の地域以外に、一九七四年よりカフカスの中央部にあるバゼンギ地区が自由主義諸国の一般登山者に解放された。
この地域および次に記すパミールへの登山手続きは、次のようにして行なわれる。
ソ連のUIAAに参加しているソ連アルビニズム連盟より、登山案内書が日本のUIAA参加団体である当会に送付される。この案内書にもとづいて申込みを行なう。時期は夏期のみ。募集人員は各国あわせて約一五〇人。だいたいの申込み受付に許可がおりる。登山申請は本会にある登山申請要領に記入する。
本年は新湯大山の会が本会の推せんを得て、カフカスのB班に参加した。

●パミール

一九七四年にレーニン峰周辺が開放され、新潟大・大阪外語大合同隊が参加した。その報告書は本会図書館にある。来年はレーニン峰周辺とコムニズム峰周辺が開放される予定である。両地区とも、各国あわせて一五〇名ずつの許可がおりる予定である。来年のコムニズム峰には、東海支部原真氏より約十名の申込みがあった。

一九七六年夏期ソ連邦パ
ミールのコムニズム峰お
よびコルジエネフスカヤ
峰遠征隊員募集について

高所登山委員会

ソ連山岳連盟の「インフォメ
ーション・レター」(『山』次号
で発表)に従い、当委員会では
一九七六年夏期、パミールのコ
ムニズム峰(七四九五m)およ
びコルジエネフスカヤ峰(七一
八〇m)に遠征隊を派遣します。
すでに隊員(含隊長)十五名
をソ連山岳連盟に仮申請済みで
すが、優秀な隊員を募集し、強
力な遠征隊を組織したいと考え
ております。登山期間は三十日
間です。七千メートル峰二座の登
頂またはバリエーション・ルー
トよりの登頂を目指しています
ので、過去三年間に五千メート
ル以上を経験した人が望ましい
のですが、今後新たにヒマラヤ
を目指す人も大いに歓迎いたし
ます。

申込先 日本山岳会高所登山
委員会または海外連絡委員
会

申込締切日 一九七六年一月
三十一日

(付記)当遠征登山では、ボー
ラー・メンソッドは採用せず、ラ
ッシユ・タクトイクスを原則と
したいと考えます。また、高度
順化期間も十日以内となりま
す。従って最終的に隊員決定次
第、低圧実験室などを利用し
て、高度順化のトレーニングを
行ないます。

静岡支部設立二十五周年
記念集会

日本山岳会七十周年記念並び

に支部設立二十五周年記念とし
て、今西錦司会長、望月達夫副
会長を迎え、10月4日、山伏岳
記念山行、5日、東海軒ホールで
記念講演会と晩餐会を催した。
13号台風で両氏来静中止とな
ったので、カラコルム、テラム
・カンリ峰に初登頂して帰国し
たばかりの、静岡大学山岳会隊
員、大原博氏の報告会に変更し
た。出席者は以下の三十四名。

荻野恭一、牧野衛、水野公男、
岩永安雄、同夫人、渡会栄一、
稲森利次、林清児、新聞幸一、
川上幸雄、石間信夫、稲垣二郎、
大石惇、田辺憲造、市野弘、三
浦巖、菅谷保夫、安間莊、久保
田保雄、沼沢竜起、大嶽宣夫、
坂下心一、小林清彦、斎藤時雄、
佐野敏郎、山口亮、川端信治、
長田義則、池上和男、勝見幸雄、
望月福次、仁藤敏彦、飯塚洋二、
山本朋三郎

日印合同女子ヒマラヤ 計画のお知らせ

7月号で既報の日印合同女子
ヒマラヤ登山(カメット)計画
は、研究会を解消し、10月3日
左記の委員会・事務局を設け、
準備に入りました。今後とも会
員の皆様のご支援をお願いいた
します。

委員会 委員長 今西錦司
副委員長 西堀栄三郎、織内
信彦

委員 日高信六郎、三田幸夫、
加藤泰安、佐藤テル、折井健
一、望月達夫、辰沼広吉、
村井米子、川森左智子、関

口周也、広谷光一郎
事務局 事務局長 黒石恒